

国際協力と犬猫のコラボ

「イヌー…」段ボールを抱えた黒人男性がこちらを見て微笑んでいる。何やら、トラックから段ボールや丁寧に梱包された家具を出している。同じアパートに黒人男性2人が引っ越してきたようだ。

今から13年前、私は当時8歳。飼い犬の散歩に出かけたところだった。背も高く体格も大きい黒人の男性は、当時の私にとって得体の知れない怖さしかなかった。ここは犬と急いで通り抜けようとも思ったが、8歳ながらの頭を回転させ「無視したら怖いことになるかも」と瞬時に考えた末、私は「ハロー」と言った。すると、相手も「hello」と笑顔で返してくれ、犬の頭をよしよしと撫でてくれた。「怖い人たちじゃないんだ」という安堵と、些細でも外国人と交流できた喜びを感じることができた初めての出来事だった。

程なくして、アパートの住民たちの間に、外国人が引っ越してきたという噂が広がった。弟と友達と、その外国人と仲良くなろうという話になり、私たちから話しかけにいった。そして、部屋に行ったり犬と戯れたりして一緒に遊んでもらった。もちろん英語は話せなかったし、その外国人も片言でしか日本語を話せなかった。それでも名前を頑張って覚えようとしてくれたし、会話の中でアフリカから日本に来たということぐらいは分かった。意思疎通は難しかったけど、お互い笑顔になれる場面もあったし、楽しいや面白いという感情を共に感じられることができた。

しかし、大人たちは、その外国人が共用のごみ捨て場に、そのままティッシュやたばこを捨てることや、部屋で大音量の音楽を聞くことにうんざりしていた。文化が違うから注意しても理解してくれないと、半ば諦めていた様子だった。早く引っ越してほしいと言う人もいた。子どもながらに、ショックだった。私からすると一緒に遊んでくれて楽しい外国人だったが、大人にとってみれば意志が通じず迷惑としか思っていないことに純粋に疑問を感じた。でもその言いようのない感情を言葉に表すことができず、そのまま時が過ぎ、2ヶ月余りで外国人はどこかへ引っ越していったらしい。

互いの異なる価値観や文化が時として対立する要因になる。理解し合おうとしなければ、不毛な溝が生まれる。歩み寄らなければ、一生同じ時を分かち合えない。このアパートでの出来事のように、多分そんな小さなことが積み重なって大小様々な国際問題が発生して

いるのだろう。

お別れの言葉もなく、気づいたら居なくなっていたという寂しさも、日々の日常の忙しさに紛れて薄まっていった。

それからというもの、プライベートで外国人と接する機会は無かった。自分自身も特にそのような場を求めて動いた訳ではないから当然だろう。強いて挙げるとすると、大学にいる猫を触っていた時、留学生がやってきて一緒に猫を触ったぐらいだ。

「どこから来たんですか？」 「America」

「Cat is pretty」 「Oh! Yes」

本当にたわいもない会話。

いつもと言えるくらい機会は多くないが、決まって私は、話しかけるきっかけは動物から始まる。同じ何かを見つめているとき、人はもっと気持ちを分かち合いたいと思えるのだろうか。犬や猫が間にいるとき、私には優しい空気が流れている感覚がある。犬猫など動物が苦手な人もいるが、私にとって犬猫は癒しを与えてくれる存在だ。だから、犬猫を連れて途上国を回って現地の人といろいろ話をしてみたいと思う。元気や癒しを感じて、そこに笑顔が生まれれば、それは人類共通の願いである平和に近づいたことになる。

「隣人を愛しなさい」かつてマザーテレサは言っていた。国際協力のための土台となる大事な部分は、ありふれたたわいもない日常からつくられる、そう考えている。